

## 第 17 回 「松江城の石垣刻印について」

### 1. 松江城の石垣に見える刻印

松江城の石垣石をよく見てみると、△や□、扇形や雁などの記号が石に刻まれていることに気が付きます。これは「刻印（こくいん）」と呼ばれるマークで、ノミ等の工具によって敲打（こうだ）して刻まれたものと、墨書で描かれたものがわずかにあります。松江城で見られる刻印は、これまでの調査の結果、令和3年（2021）時点では31種類、1,168個もの刻印が確認されています。また、一つの石に一個とは限らず、違う種類の刻印が複数記されているものもあります。

こうした刻印は松江城だけでなく、他の城郭の石垣でも見られます。刻印を記す意味は、城郭によっても異なりますが、天下普請で石垣を築いた城郭では、石垣普請に協力した大名が、それぞれ担当した持ち場の石垣に自分に由来する記号を付けたり、採石場で目印として付けられたものもあるとされています。松江城では、堀尾氏の下でそれぞれ石垣普請に携わった工人集団が記したものではないかと考えられています。



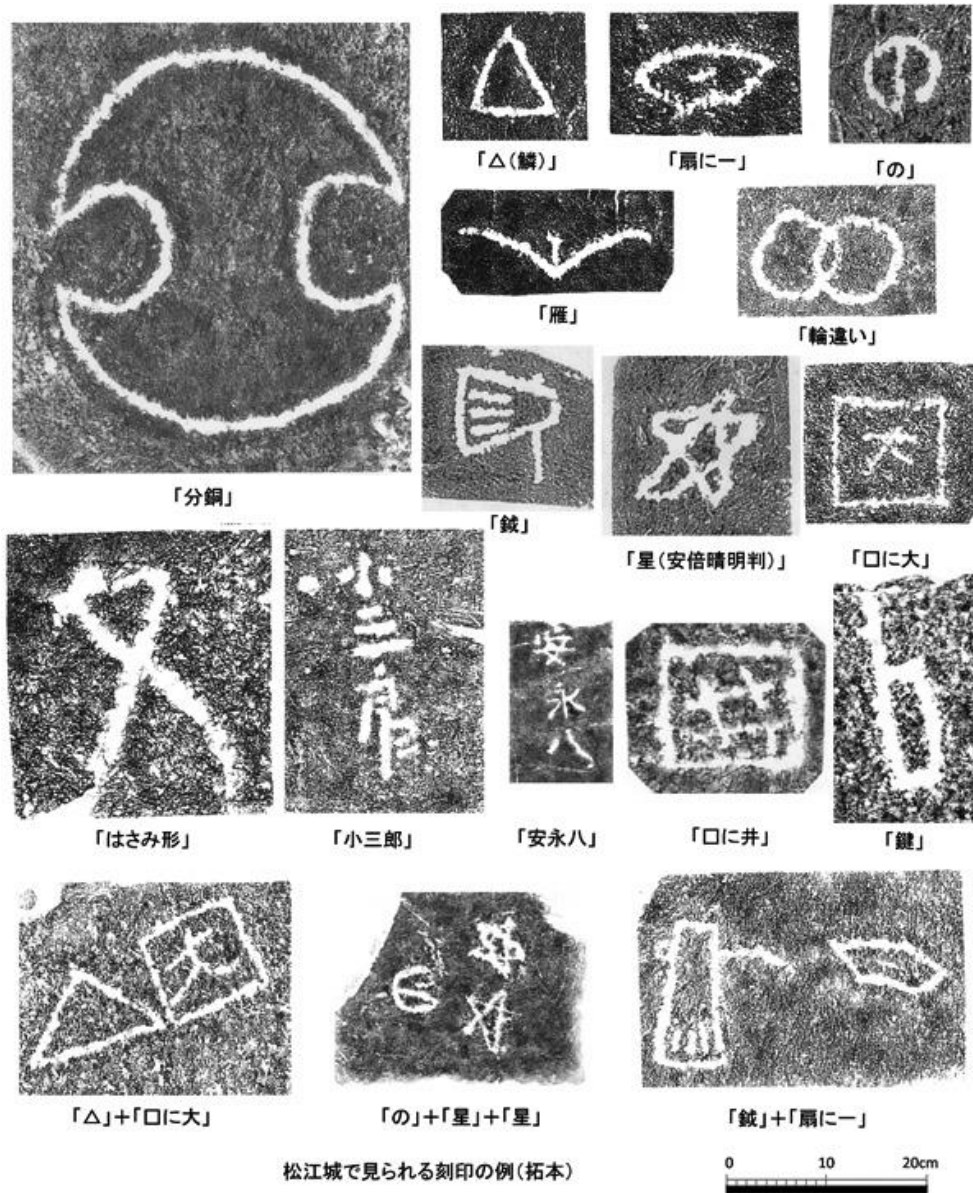
【図 1】 刻印「△（鱗）」



【図 2】 刻印「扇に一」



【図 3】 墨書「まさかり」



松江城で見られる刻印の例(拓本)

松江城の刻印で最も多い種類は「△(鱗)」【図1】で、全体の20%を占めます。次に多いのが「扇(扇の地紙を模した形)」【図2】で18%、「雁」13%、「の」11%の順に続きます。その他、「鉞(まさかり)」【図3】や「星(安倍晴明判)」、○を2つ重ねた「輪違い」、「口」の中に「大」や「井」の文字を入れた刻印も見られます。また、珍しい刻印としては人名と考えられる「小三郎」や、石垣の修理年号を示すと考えられる「安永八」(安永8年は1779年)もそれぞれ1個ずつ見つかっています【図4】。

【図4】松江城で見つかる刻印の例(拓本)

## 2. 刻印の分布状況

松江城内で刻印の分布状況には特徴が見られます。刻印が最も集中している場所は中曲輪（なかくるわ）東面石垣（二之丸下ノ段広場に面した石垣）【図5】で418個（36%）、次いで二之丸下ノ段堀石垣（堀川遊覧船が通る内堀の石垣）【図6】が292個（25%）、腰曲輪（こしぐるわ）北東部（馬洗池近くの水之手門跡石垣）【図7】が266個（23%）で、この3箇所だけで全体の8割を占めています。

一方、刻印が少ない場所は天守台石垣の5個をはじめ、本丸や二之丸の石垣で、これらを合計しても全体の5%に過ぎません。

こうした分布の傾向を見ると、全体としては城郭の中でも下段の曲輪で、かつ東に向いた石垣に集中する特徴が見られ、逆に本丸などの上段の曲輪や西側に向いた石垣には少ない傾向が見られます【図8】。



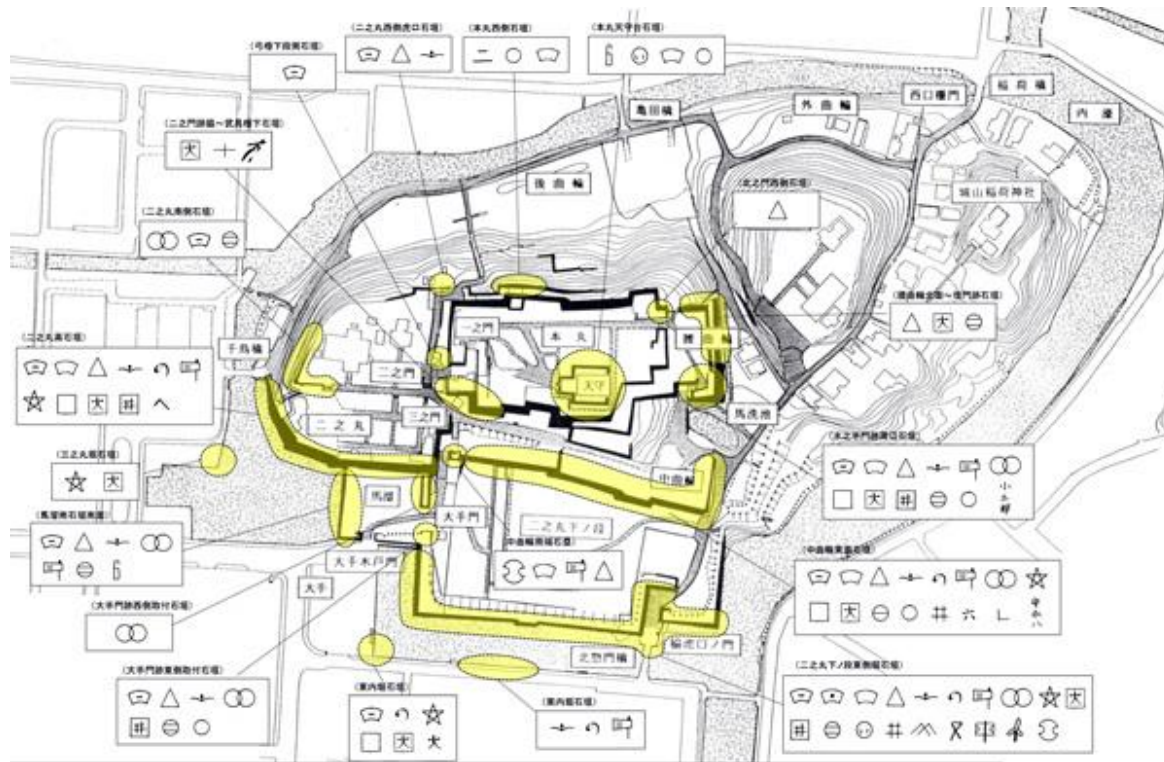
【図5】中曲輪東面石垣



【図6】二之丸下ノ段堀石垣



【図7】水之手門跡周辺石垣



【図8】松江城石垣の刻印分布図（向かって右が北）

### 3. 堀尾氏の家紋「分銅」

刻印のほとんどは記号ですが、その中には堀尾氏の家紋として使われた「分銅（ぶんどう）」の刻印があります。この分銅紋は、秤の分銅の形を模したもので、中曲輪の南端にある石塁だけに見られます。また、通常の刻印は8~15cm位であるのに対して、分銅紋は最大36cmもあり、格別に大きいという特徴があります。現在15個の分銅紋が見られます。

分銅紋の刻印は、大手から二之丸へ登る石段の脇の石垣にあり【図9】、登城する人が必ず通る位置にあることから、松江城を築城した堀尾氏が自分の威厳を示すためのものではないかと想像されます。



(南面)



「鏡」

「扇」

石垣修理工事中に天端石の石尻面で「鏡」と「扇」の刻印が発見されたことが当時の報告書中に記されている。



(東面)



石垣の側面に「△」



(西面)

【図9】中曲輪南端石罫で見られる分銅紋（写真に拓本画像を貼付けて加工しています）

松江城の石垣刻印は、今後も調査が進めばまだまだ増える可能性があります。令和4年（2022）3月末に刊行する『松江城研究』4では、水之手門跡周辺石垣の刻印調査結果を詳しく報告する予定です。

（松江市歴史まちづくり部史料調査課長／飯塚康行／2022年2月10日記）

#### 【参考文献】

- 乗岡実 2017 『ふるさと文庫 19 石垣と瓦から読み解く松江城』 松江市
- 松江市 2018 『史跡松江城石垣総合調査報告書』
- 松江市 2018 『松江市史』別編1「松江城」
- 岡崎雄二郎、乗岡実、飯塚康行、徳永隆 2020 「松江城の石垣刻印分布調査について（2）-中曲輪東面石垣-」『松江市歴史叢書』13、松江市